

老人ホームのサロン

ファンシヨ：駄目です、錠前師を呼ばなくては駄目でしょう。誰かが鍵穴の奥にガムを詰め込んだようです。

医師：ああ、神の恩恵を（困ったなあ）！

えーと、どうかなあ、エミリオ此处でテストをしようと思うのですが、診断室の扉の調整のために。または、もし騒音が大きければ他の日にしても良いのだが。

エミリオ：いいえ、いいえ、ここで良いですよ。私は構いません。

医師：分かりました、では、えーとちょっと待ってください、いま資料（問診票）を出しますから、ではエミリオ、昨夜の夕食について私に話してくれませんか。

エミリオ：夕食について、夕食の何について貴方にお話しするのですか。

医師：はい、例えば最初に何を食べたか。

エミリオ：ああ、ええ、私達は最初に、最初に私達は何を食べたか...

医師：ええ、他のなんでも構いませんよ、夕食で覚えているものなら。

ラモン：夕食、夕食、夕食...

医師：今は駄目だよ、ラモン、今、私達は忙しいのだ。お願い、どうかラモン。

ラモン：私達は忙しい、私達は忙しい、私達は忙しい...

医師：もう十分だよ、ラモン、お願いだから、黙って。

エミリオ、エミリオ、君、大丈夫？腕がどうかしたの？

エミリオ：ああ、いいえ、いいえ。

医師：ねえ、ラモン、エミリオの気をそらせては駄目だよ。彼は重要なことをしているのだから。

さてエミリオ、私達は最初に返るのが良いだろう、昨夜の夕食について話してみて。

エミリオ：はい、夕食ですね、先生、夕食の内容には、実のところいつも気にしていません。だいたい同じ様なものですから。

医師：そう、君の言う通りだね。そう変わったものは出ないからね。そう、重要ではないね。では続いて...
庭で

ミゲル：いやあ、おんぼろ火災報知機で指を傷つけてしまった。彼らを訴えなくてはならないかな、ロッケフェレ、君はどう思う。

エミリオ：うまく行かなかった。そうだろうね？

ミゲル：いいや、なんでそんなこと言うの、全部うまくいったよ。こんな風になるだろうことを私にまかせて、明日は腰が痛かったり頭が痛かったりの人間で医者には忙しくなるよ、だから君のことを思い出すのは来年になると言うことだ。何にも心配することはないよ、ロッケフェレ、すべてうまく行った。

マルティン：ウムー、ミゲル！

ミゲル：やあマルティン、どう？、何か話があるの？ライカは元気かい？今でも、スリッパをかじっているの？
ええっ？しかし早いな？

マルティン：そう、ほかのを、続いてお願いできないかな？

ミゲル：いいよ、君、心配しないで、続いてさがしてみよう。君にフォックステリアを見つけてみよう。
食堂で

人が歳を取るのは当たり前
歳を取らない人は誰もいない
家族に迷惑を掛けたくない
仕事の邪魔もしたくない
しかし私達を呆け老人と呼ばないで
何故なら気分は、ぼろ、皺だらけではない

私達は歳をとった市民です

ここまでできたの、でもこの続きが思い付かないの

ミゲエル：どう思う、私達は高齢者、震えていっぱいだ。

アントニア：ああ ミゲエル、いつもと同じね。

ミゲエル：さらにこれはどうだろう、私達は高齢者、ただ痛みだけで生きている。

エミリオ：ウエイター！ウエイター！ウエイター！

ミゲエル：どうしたんだ、エミリオ？

エミリオ：これはひどいナイフだ、切れない！

Camarera：どうしたの エミリオ？

エミリオ：これが...これが...

ミゲエル：ええと、エミリオと私が聞きたいんだ、今後、私達の食事はサンドイッチにしてもらえるかと。

Camarera：サンドイッチ？

ミゲエル：そうなんだ、美味しいサンドイッチさ、分かる？

Camarera：そうね、それは多分出来ると思います。エミリオ貴方もサンドイッチですか。

エミリオ：そうだな、私もサンドイッチがいい。

Camarera：あなた方の言うこと分かったわ、調理室に伝えておきます。ただ後で文句を言わないでね。

ミゲエル：有難う、どんどん美人になっていくね。

ミゲエル：ねえ、エミリオ何故そっちのナイフを使わないの、皿の横にあるものだ、良く切れるよ。

エミリオ：なんでこんなに沢山、沢山あるのだ、私達を混乱させるためか？

ミゲエル：確かにロッケフェレ。しかしこれからは美味しいサンドイッチになる、もう問題はない、
そう思わない、ロッケフェレ？

アントニア：悪い考えではないはエミリオ、私は入れ歯だから無理、私も同じように試みたいわ。

ミゲエル：ほらな、エミリオ。

ドロース：ほら、垂れているわ、いまきれいにしましょう。

エミリオ：彼は何と言うと微笑むのですか？

ドロース：モデスト？ 私？

エミリオ：君が言うと微笑む。

ドロース：“インチキね” って言うの。

エミリオ：インチキ？ 何故？

ドロース：私達が子供だった頃の話なの、小さな村に住んでいました、12歳か13歳の頃でした。

モデスト：ロリ、僕の恋人になって。

ドロース：何ですって？

モデスト：聞いて、恋人になって欲しいのだ。

子共達：へえ... モデストはドロースが好き、モデストはドロースが好き。

ドロース：黙って、やめてよ！ いいわ 恋人になってあげる、でもその前に雲を取ってくれたらね。

子共達：モデスト、君は私達を驚かしたわ、さっさとドロースに雲を探していらっしやいよ。